

第30号

発行 2025 年 11 月 4 日

編集代表 西本 孝

NOI 岡山通信

日本自然保護協会

岡山県自然観察指導員連

絡会 (NOI : Nature

Observation Instructor)

ごあいさつ

代表世話役 西本 孝

2025 年秋に、中国地方の自然観察指導員の皆さんを招いて 5 県交流会を開催しました。2 日間は、いずれも天気予報は雨でしたが、幸い私たちが野外で活動している時間帯には、雨はあがり、充実した自然観察会となりました。取り上げた話題は、「沿岸域の自然保護」でした。浅口市寄島町で見つかった野生のアクセシソウを巡る話題では、発見の経緯や地元での永年の保護活動、野生であることが系統進化の研究により明らかになったこと、カブトガニの話題では、恐竜よりも前から地球上に現れ、恐竜が絶滅しても生き続けている生きものが、近年の新しい発見により注目を浴びていること、笠岡湾干拓地では、干拓により広大な農地で地元の高校生が植物調査を続けて、身近な植物がどのように定着しているのかを追跡して成果を上げていること、などを話題として取り上げ、遠路訪問した方々と交流を深めました。詳細は、坪中さんが詳細な報告をしてくれています。

活動報告 (2025 年 10 月)

中国地方 5 県交流会と第 34 回自然観察会

- 開催日：10 月 25 日 (土) ~ 26 日 (日)
- 内容：中国地方 5 県交流会。干潟の自然保護に関する講演会と寄島町のアクセシソウ保

護区の視察、カブトガニ博物館の訪問、笠岡湾干拓の現状を視察した。

- 詳細は坪中さんの報告を参照

今後の活動予定 (2026 年 6 月まで)

講演会と忘年会

- 日時：12 月 14 日 (日) 13 時~18 時
- 講演会：13 時~15 時
- 講師：小林秀司先生 (岡山理科大学教授)
- 内容：岡山のほ乳類 (仮題)

- 忘年会：15 時~18 時

- 場所：e-Tam 自然と教育研究所

- 連絡先：西本 taknishi@js4.so-net.ne.jp

第 35 回自然観察会

- 日時：4 月 26 日 (日) 10 時~14 時
- 場所：毛無山(新庄村)の登山道
- 特徴：早春のブナ林の林床で開花する春植物

を観察。毎年同じ時期に希少なブナ林を訪れて、自然環境の変化を実感する。

- 連絡先：西本 taknishi@js4.so-net.ne.jp

年次総会と第 36 回自然観察会

- 日時：6 月 14 日 (日) 10 時~15 時
- 場所：矢掛町

- 特徴：担当は、立間さん。詳細は決まり次第報告します。

中国地方五県交流会 2026 in 島根 と自然観察会 37 回

- 日時：6 月 27 日・28 日 (土・日)
- 場所：日御碕、立久恵峡
- 特徴：島根県が担当で、日御碕に集合し、翌

日は立久恵峡へ。詳細は連絡を受け次第報告します。皆さん予定しておいてください。

- 連絡先：西本 taknishi@js4.so-net.ne.jp

年会費

会費は、年度払いです。総会で支払うか、郵便局等で振り込んでください (手数料は各自)。

- ゆうちょ銀行 記号 15440 番号 38433761 NOI 岡山

- 他金融機関からの振り込み 店名五四八 店番 548 普通預金 3843376

中国地方 5 県交流会 2025 が 10 月 25、26 日に行われ、42 人（宿泊者 36 人（岡山 9 人、鳥取 5 人、島根 9 人、広島 7 人、山口 6 人）、当日参加者 6 人（岡山 5 人、広島 1 人））が参加し、学び、交流しました。

初日は、浅口市寄島町のふれあい交流館サンパレアで開会。岡山連絡会の西本孝代表は、5 月に発表された「日本における質の高い海洋保護区の推進に向けた提言～海をめぐる社会生態学的危機及び沿岸域の将来像～（中間報告）」の概要を紹介し、「沿岸域での保護活動の話を聞き、私たちがどのように関わっていけばいいのかを話し合っていこう」とあいさつしました。

講義①は、浅口・寄島アッケシソウを守る会の作田雅利顧問が、平成 15 年（2003 年）に本州唯一の自生地として確認された翌年に旧寄島町（合併後は浅口市）の文化財（天然記念物）に指定されて以後の保護活動を報告（写真 1）。「老人会が中心の守る会を 40 名で発足。勉強会や自生地の調査、樹木やヨシの伐採を行った。新聞やテレビ、ホームページなどで全国発信をすすめ、平成 21 年（2009 年）から、10 月中旬からの 10 日間、「アッケシソウ祭り」を開催し、最盛期は 1 万人超の参加があった。コロナ禍で 4 年間中止したが、現在は毎年 4～5 千人が訪れている。高齢化で困難になりつつあった草刈り作業に、近隣の高校の運動部生徒や地元のスポーツ少年団、清掃センター職員などが応援に来てくれ助けられている」と述べました。

講義②で、岡山理科大学の星野卓二名誉教授は、アッケシソウの生態を説明した後、岡山、愛媛、香川の瀬戸内沿岸のアッケシソウの現状を報告（写真 2）。「群落の自生地が見られるのは寄島だけでとても重要だ」と指摘しました。2011 年頃からアッケシソウの枯死や倒伏が生じたため、群落再生に向けて草刈り、耕うん、播種などの比較実験を行ったことを報告し、「アッケシソウは 1 年草なので、ヨシなどを刈り、緑藻類やラン藻類を除去し、日光が当たれば生育する」と述べました。「最も大切なのは海水だ。2022 年に自生地に柵をつくり、満潮時に U 字溝から海水が供給されるようになると生育のばらつきがなくなり群落が拡大した」と強調しました。星野氏は、瀬戸内のアッケシソウの葉緑素の遺伝子が北海道のものと全く違い、韓国のもと同じだったことを紹介し、「日本と韓国のアッケシソウは干潟や塩田と跡地に見られることが共通している。韓国との交易で人為的に持ち込まれたのだろう」と述べました。最後に群落再生のために、「行政と地域住民の継続性のある協同体制と保護活動の拠点づくりが欠かせない」と述べました。



写真1. 作田雅利顧問が、アッケシソウが偶然発見された後の保護活動の経緯について紹介



写真2. 星野卓二岡山理科大学名誉教授が、アッケシソウの系統進化について紹介

講義③で、笠岡市立カブトガニ博物館の東川洸二郎学芸員は、カブトガニが 2000 年に環境省、2019 年に国際自然保護連合（IUCN）にそれぞれ絶滅危惧Ⅰ類に指定されたことを示し、「世界的に保護意識が高まっている」と述べました（写真 3）。「カニ」の名前がついているものの、甲殻類でなく、クモやサソリなどの鋏角類に属していることを示したうえで、「血液は白色で攪拌されるとヘモシアニンの青色になり、また、医薬品や薬剤に人にショック死をもたらすエンドトキシンという毒素が入っていないかの有無を調べるのに世界中で使われている」と述べました。「2～3mm の卵が受精後に殻が割れ、海水を吸って 6mm の大きさになり、中で幼生がえらで酸素を送りながら後ろ向きに回転する」と動画で紹介しました。「約 50

日で孵化し、幼生は1回の脱皮で1.3倍の大きさになり、10年以上で最終の脱皮を終え、生体になる」と述べました。東川氏は、カブトガニにしか見られない形態上の数々の特徴をオス、メスの共通点と違う点を説明しました。昭和44年（1969年）からの干拓事業で鳥取砂丘3個分に相当する1810haが埋め立てられ、干潟の減少により野生のカブトガニが著しく減少、絶滅に瀕し、昭和3年（1928年）国の天然記念物に指定された笠岡湾奥の生江浜が解除され、後に指定された神島水道だけになっている現状を詳述しました。「平成2年（1990年）設立のカブトガニ博物館で人工飼育と放流を繰り返した。2年前に漁師の網に引っかかったカブトガニが75匹で過去2番目に多い数となり、回復基調にある」と述べました。

講義④は、岡山龍谷高校の生徒3人が、笠岡湾干拓地の自然が復元されているかどうかを、在来と外来のそれぞれのタンポポ群落の分布調査結果に基づき報告しました（写真4）。植生、土壌、発芽、種子の散布能力の比較分析から、「在来タンポポは外来タンポポの繁殖力に負けている。干拓から35年経ち、大規模開発が日本の自然の復元を困難にしている。在来タンポポの群落の保護が必要だ」と述べました。また、干拓地にある「太陽の丘公園」に生育するアッケシソウが、1～2%の塩分濃度で生育しやすく、ヨシなどの草刈りが重要であることを指摘。「生育地を保護し、観光地化や食品利用などにつなげたい」と述べました。



写真3. 東川洸二郎学芸員が、カブトガニについて、保護すべき意義について紹介



写真4. 岡山龍谷高校の高橋先生と学生が、笠岡湾干拓地の植物の現状について紹介

講義後に参加者は、浅口市のアッケシソウ保護地に向かい、守る会の藤沢福夫会長から説明を受け、紅葉したアッケシソウを観察しました（写真5と6）。



写真5. 守る会の現在の藤沢福夫会長が、現在の保護活動の状況を紹介



写真6. 満水時に海水を導入するために設置した柵(左奥)とU字溝(左奥から右手前への溝)

一行は、金光町の土佐家旅館に移動。西本代表が、鏡野町の風力発電所建設計画が中止になったことを報告すると、参加者は拍手で喜び合っていました。品数豊富な仕出し料理とすき焼きの一人鍋にとっても満足していました（写真7）。2次会、3次会も盛り上がりしました（写真8）。



写真7. 土佐家旅館での品数豊富な料理やすき焼きの一人鍋を堪能した夕食会



写真8. 持ち寄ったお土産を紹介する人々の話に歓声が上がった二次会

2 日目はカブトガニ博物館に向かいました。東川学芸員が参加者の質問に答えながら、館内のカブトガニの進化や分類上の新知見を紹介すると、「へー」という驚きの声が上がりました（写真9と10）。カブトガニの体の機能や生態をわかりやすく紹介する映像を視聴し、2 億年前から姿をほとんど変えずに干潟に適応してきたカブトガニという特異な生き物を深く理解することができました。



写真9. 博物館のエントランスホールで、東川学芸員が、カブトガニの進化の歴史を解説



写真10. 東川学芸員は、カブトガニの進化について、展示にはない最新情報を紹介

次に、笠岡湾干拓地の「太陽の丘公園」西側の用水路沿いに帯状に生育しているアッケシソウを視察しました。案内した岡山龍谷高校の高橋和成教諭は、ヨシなどが刈られ、海水が堤防の下から染み出しているところにアッケシソウが生育している現状を説明（写真11と12）。「笠岡のアッケシソウはあまり注目されていないが、貴重なアッケシソウにもっと関心を持ってもらいたい。教育活動では限界があるので社会活動として広めたい」と述べました。笠岡のアッケシソウ保護に取り組んでいる地域の方とも会うことができました。高橋教諭は「笠岡湾は、干拓前は豊かな漁場だった。干拓後の農地に入植したが、出た人も多く、今は畜産業でもっている現状だ。干拓事業がどうだったのか検証が必要だ」と述べました。



写真11. 笠岡湾干拓地の水路に沿って生育するアッケシソウについて高橋教諭から話を聞く



写真12. 湾の内側に造られた人工干潟には、アッケシソウをはじめ、多くの塩生植物が生育

閉会の場で、島根の柴田一樹氏は来年6月27、28日に予定されている5県交流会の訪問地を紹介し、参加を呼びかけました。

参加者有志は、ソーラーパネル計画のあった干拓地の寺間遊水地に向かいました。そこでは、野鳥が何種類か観察できたほか、参加した一人が、これまでしばしば通っても出会えなかったという絶滅危惧種のクロツラヘラサギの撮影に成功しました。



写真13. アッケシソウ保護区で、保護団体の方々と一緒に記念撮影



写真14. 恐竜がいた時代の植物が植えられた博物館前の広場で記念撮影